

# 東北学院時報

東日本大震災  
10年  
特別号

発行  
学校法人東北学院  
〒980-8511 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号  
電話 022-264-6423  
FAX 022-264-6478  
中学・高校 ☎022-786-1231  
榴ヶ岡高校 ☎022-372-6611  
幼稚園 ☎022-368-8600  
編集兼発行人  
原田善教  
編集  
法人事務局広報部

## 東日本大震災10年 (2011.3.11)から 本院は今後「何をなすべきか」

大震災から十年を迎え、様々なところで記憶の風化が問題となっています。本院にとってもこの十年間に新たに教職員となったものが約四分の一、さらに十年後には三分の二が本院での震災経験を知らない教職員で占められることとなります。その間、多くの園児・生徒・学生はそれぞれの在籍年を終え巣立っていきます。そのような問題を前にあらためて本院が大震災で経験した事柄、教育・研究の成果、そして今後「何をすべきか」「何をなすべきか」を理事長、院長、各設置校の長のメッセージとして、また、将来、記録の整理、蓄積と活用を行うため十年目のマイルストーンとして、本特集号を編集いたしました。今後の参考となれば幸いです。



### 世の中に貢献できる教育と成果で支援の恩返しを

学校法人東北学院 理事長 原田 善教

震災後は、学部長として学生の安否確認が第一の使命でした。日々電話をかけ、三月の終わりに最終確認できたことが印象深い出来事です。震災当日は避難した体育館で一夜を明かしたわけですが、停電していたので非常用発電機を動かそうとしたところ



### 地域とともにあり続ける東北学院大学として

学校法人東北学院 院長 大西 晴樹

被災時は東京の大学に勤務しており、被災地から入る情報に日々驚かされてきました。震災後すぐに大学として何かできないかと働きかけ、若手県立大学の紹介で大槌町の吉里吉里へ、もともとあったボランティアセンターが活動しました。東北学院大学でも災害ボランティアステーションが立ち上がり、被災地の復興に貢献していると聞いていました。地域への支援活動を継続させていくためには、あの時の経験を後世に伝え広めていかなければなりません。学長就任の夏に『夏ホラ』を視察し、学生たちが地域の人の声を聞き、語り部として繋いでいく姿を見ました。学生が語り部大使を委託され支援活動の積極的な担い手になっていくことに、学生ボランティアの今後の可能性を強く感じました。

被災時は東京の大学に勤務しており、被災地から入る情報に日々驚かされてきました。震災後すぐに大学として何かできないかと働きかけ、若手県立大学の紹介で大槌町の吉里吉里へ、もともとあったボランティアセンターが活動しました。東北学院大学でも災害ボランティアステーションが立ち上がり、被災地の復興に貢献していると聞いていました。地域への支援活動を継続させていくためには、あの時の経験を後世に伝え広めていかなければなりません。学長就任の夏に『夏ホラ』を視察し、学生たちが地域の人の声を聞き、語り部として繋いでいく姿を見ました。学生が語り部大使を委託され支援活動の積極的な担い手になっていくことに、学生ボランティアの今後の可能性を強く感じました。



### 大切なのは、見えないところで起きていることを想像する力

中学校・高等学校 校長 阿部 恒幸

震災当時は県庁で高校入試の担当をしていました。合格発表前でしたので、合格発表、第二次募集、入学準備、入学式を含む学校再開までの大幅なスケジュール変更を頭を悩ませたことを覚えています。その他にも、学校からのひびきがありました。あれから改めて振り返って思うことは、見えないところで何が起きているのかを想像する力が大切だということです。例えば、沿岸部に比べてほぼ被害の無かった仙台市中心部の学校からは、いつまで遊ばせておくのか、部活だけでもやれないかといったお叱りを受けました。仙台市内でもようやく動き出した路線バスに乗れず、次を待つビジネスマンが車内に部活に向かう高校生を見たとき何が起きているのか、沿岸部の子どもたちは何を思っているのか、なかなか理解してもらえず残念な思いを持ちました。その後異動した教育研修センターでは、心のケアに力を入れたことを覚えております。その経験を生かして、今後とも子どもたちが災害時に心に傷を負わないようケアしていきたいと思っております。



### 震災十年を契機に、もう一度被災地への思いを忘れずに

榴ヶ岡高等学校 校長 湯本 良次

十年前の震災を経て、多くの方々から応援をいただきました。現在では生徒たちが被災地に向き、ボランティア活動などでお返ししています。特に吹奏楽部あるいは音楽部は音楽を通しての癒しであったり、運動部を中心とした肉体的なボランティアであったり、そうした活動が少しずつ広がりをみせていると実感しています。しかし、まだ不十分なこともあり、生徒たちが今どのような社会に関わることができているかを授業を通じて学んでいます。これまでの避難訓練は教員主導で行っていましたが、教員が常にそばにいないわけではなく、学校以外のところで災害に遭った時に自主的に動けるよう、従来の避難訓練を生徒主導、生徒会主導の避難訓練に変えたことで、これまでより私語は少なく、集合も早く、整然と避難訓練ができるようになってきています。地震を契機に考え方を変えた防災教育は新聞等にも取り上げられており、本校が目指す自律自励という考え方が一つづつ生徒たちに浸透してきたと実感しています。また、奨学会の方々のご協力によってAEDの訓練や炊き出しなど



### 語り継ぐ大切さと災害時の心の有りよう

幼稚園 園長 島内 久美子

東日本大震災を振り返りますと、幼稚園が再開されてようやく日常に戻った時、子どもたちは元気に遊ぶ反面、心の中に残っていた不安を無意識に表に出してくるようになったことを思い出します。その一つが「津波っこ」でした。遊んでいると思っていたら突然「地震です。津波がきます。避難してねえ」と教員の手を引いて「先生も早く高いところに逃げて」と高い所へ移動し走り出しました。また、癒され、夢や希望であふれる絵本が海の中へ入っていくペーシにさしかかると、ぼつりと「先生この人は海で溺れているの？」と聞かれたことがありました。楽しいはずの絵本が、一気に津波のイメージに重なってしまったのです。そうした状況を教職員で話し合い、心のケアを最優先とし、子どもたちが心の不安を表に出してきた時には全てを受け止め幼稚園では安心して過ごしていけるよう心掛けていました。震災以降の安全管理においては、当時ど、万一の災害時に自主的に行動できるような取り組みも始めており、生徒と保護者として学校が一体となった防災訓練を行っています。地元から震災の風化が始まれば発信力が弱まり、かつ震災の経験そのものが消えてしまします。二〇二一年二月十三日二十三時八分(最大震度六強)に起きた大きな地震によって、あの震災を忘れてはならないという強いメッセージを受け取ったと思います。生徒も教職員も、東日本大震災から十年を契機に、もう一度被災地への思いを持ち続けることを忘れずにいたいと考えています。毎年、東北学院大学に進学する生徒たちに志望動機を確認する校長面談を行っています。警察官や消防士の方々が率先して活躍している姿を見て、自分も警察官、消防士になりたい」という強い志を持っていく生徒が増えています。そういう生徒が年々増えていることに心強さを感じ、地元から離れても東日本大震災を経験した一人ひとりが、各地で活躍してくれると期待しています。

東日本大震災に関わる 調査・研究・教育・支援活動年表 抜粋

2012年 2011年
Table with columns for dates and descriptions of events from 2011 and 2012.

2012年
Table with columns for dates and descriptions of events from 2012.

2013年 2012年
Table with columns for dates and descriptions of events from 2012 and 2013.

2014年 2013年
Table with columns for dates and descriptions of events from 2013 and 2014.



Table with columns for years (2019, 2018) and months (10, 7, 4, 2, 3, 11, 10, 8, 7, 6). Contains event descriptions for various dates.

Table with columns for years (2021, 2020, 2019) and months (3, 11, 10). Contains event descriptions for various dates.

- 「震災と文学」開催記録
2013年度(全5回)
2013.10.25 「小説に何ができるか〜仙仙海市の物語を通して」/熊谷達也(作家)

- 2017.12.8 「近代史における〈災後〉をいかに考えるか」/御厨貴(東京大学先端科学技術研究センター客員教授)

- 日本大震災合同調査報告書編集委員会編 崎山俊雄(分担執筆)(日本建築学会)

震災関連書籍一覧

- 2011.7 「巨大津波が襲った3.11大震災(英訳版)発生から10日間東北の記録」/村野井仁監修(河北新報社)

東日本大震災10年事業

大きな犠牲と被害を被った未曾有の東日本大震災から2021年3月11日で10年を迎えました。この間、本院教職員は自ら被災しながら、学生の保護や避難場所の運営、被害の復旧などに始まり、現代社会の脆弱さ、自然との調和の重要性、ボランティア活動の推進並びに今後の防災意識の醸成など大震災の経験を踏まえた教育及び研究を行ってまいりました。

- (1) 理事長、学院長及び設置学校の長による公式メッセージ等の配信
(2) 東日本大震災発災以降の取り組みのアーカイブ事業(※本院Webサイトの更新)